
憂のおくりもの

クリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憂のおくりもの

【コード】

N6855P

【作者名】

クリア

【あらすじ】

憂が梓達と一緒に考えて、唯の誕生日に最高のプレゼントを渡す話です。

私、平沢 憂の高校生活で2回目の冬がやって来ました。今年の冬も去年と同じぐらいに寒く、コート無しでは学校に来れないほ
どです。

そんな中、私のお姉ちゃんは受験生の宿命ともいえる受験勉強を
洩先輩達と頑張っており、毎日ヒイヒイと悲鳴を上げながら家に帰
る生活が続いているのです。しかも最近は一太に触れていな
いせいで中毒症状が出始めており、少し元気がありません。

何とか元気にしてあげたいのだが、なかなか良い方法が思いつか
ない状態で困っている毎日が続いています。

そんな時でした。

「憂、唯先輩の誕生日に出すプレゼント決まった？」

昼休み、梓ちゃんが少し恥ずかしそうな表情で私にそう聞いてき
た。

本当は私のお姉ちゃんの誕生日はまだ一ヶ月先。けれど、受験
日が近いので早めに決めて渡そうと私と梓ちゃんは決めていました。

そして討論する事約三週間、未だに決まっていない現状だったりして……

「純ちゃんも案を出してくれるのだが、『ロシアンルーレット風のたこ焼きパーティー』や『トランプ大会』など変わったモノなのでちよつと……」

「私もまだ決めてないよ」

私がそう言うと梓ちゃんも少しだけ安心した表情になる。私自身も今年は困っている状態なので、梓ちゃんがプレゼントを決めていないと聞くとどこかホツとしていたり……

すると純ちゃんがご飯を食べながら、ある提案を出しました。

「もう面倒だから、私達で演奏すれば？ 唯先輩って軽音学部だし、音楽をプレゼントすれば喜ぶと思うけど……」

……しばし言葉を失う私と梓ちゃん。『灯台下暗し』とはまさにこの事だと、互いに感じざるを得なかった。

音楽……音楽ねえ……うん……凄く良いっ!!

「純ちゃん、ありがとう!!」

「純っ、あなたって天才ね!!」

私と梓ちゃんが嬉しそうにそう言うと、純ちゃんは困った表情で『あっ、ありがとう……』と言った。

放課後、さつそく私達は何を演奏するのかを決めるべく、音楽室へ集まっていた。今現在、お姉ちゃん達は受験勉強のため図書館に行っているの、この部室は私達の使い放題なのです。

「さてさて、何を演奏しようか？」

「やっぱりクリスマスが近いからクリスマスソングにしたらどうかな？」

「梓ちゃん、それ良いね!!」

こうして曲は早々と決まっていき、クリスマスソング一曲と『アメイジング・グレイス』をやる事になった。

ちなみに『アメイジング・グレイス』は私の大好きな曲の1つで、決まった時に胸いっぱい嬉しさが湧いてきました。

「それじゃ早速、ギターとオルガンの楽譜を買いに行こうか」

純ちゃんがそう言って立ち上がるうとするのを見て、私は慌てて言った。

「純ちゃん、ちょっと待って!!」

「憂、どうしたの？」

純ちゃんは驚いた表情で私を見ている。それが妙に恥ずかしい
というか、気まずいというか……

でも、これだけはハッキリと伝えたいので勇気を出してこう言っ
た。

「あのね、私はオルガンじゃない楽器を使いたいんだけど……駄
目かな？」

私の言葉を聞いてキョトンとする2人。何とも気まずい雰囲気
が出来上がってしまった……

「えっ、憂ってオルガン以外に楽器出来るの？」

「うっ、うん……一応」

「……まじっすか？」

梓ちゃんと純ちゃんは、信じられないという顔をしていた。

「それで、楽器は何なの？」

梓ちゃんが恐る恐る聞いてくる。そんな彼女の行為を見ている
と、胸がチクリと痛むのは何でだろう……

「えっと……小さい頃におばあちゃんから貰ったオカリナなんだ
けど……」

『オカリナ！？』

2人の出した大声に私は思わずビクリと体を震わせた。そして純ちゃんが悔しそうにソファアを叩いて叫んでいた。

えっ、えっ、えっ！！ 何、私が何かしたの！？

「わあ、聞きました梓さん！！ やはりこやつは、天衣無縫な才能を持っていますよ！！ 弦楽器だけでは飽き足らず、管楽器まで！！！」

「落ち着いて純！！ いくら憂が私達以上の才能の持ち主だとしてもそれは無いから！！ あつたら世界は平等では無い！！！」

「ふっ、2人ともどうしたの！？」

2人の反応を見て驚きながらも私がそう聞くと、梓ちゃんが苦笑しながら言った。

「実は私達、憂が1人でギターを演奏しているのを聴いちゃって・・・」

「えっ！！！ あの遊び感覚で弾いた演奏を聞いていたの！？」

梓ちゃんのまさかの発言に私は驚きを隠せなかった。

思い出すこと一ヶ月前、私はお姉ちゃんに用事があったので会いに行こうと軽音部にやって来たのだが、部室には誰もいなかったのだ。

仕方ないので帰ろうとした時、不意にギタースタンドに掛けられたギターが目映ったのだ。ギターの演奏方法は、お姉ちゃんによく勉強していたで知っていたので、悪戯半分でそのギターを弾いて時間を潰していたのであった……

はい、回想終了。でも、記憶を良く思い出すと梓ちゃん達とは会っていないのだが……

「実はあの時、私と純の2人は部室前の廊下において、部室を覗くと憂がいたから話しかけようとしたんだけどさ、憂が楽しく上手に弾いてるから入れなかつたんだよね……」

「上手につて……梓ちゃん、私はそこまで上手くないよ？私よりも梓ちゃん達の方がずっと上手だよ」

私がそう言った途端に純ちゃんが『うが〜!!』と叫び、手を思い切り高く上げた。

「どんだけ自信ないんだよっ!! 私達よりずっとずつつつと上手かった!! 正直言って憂のギター演奏に惚れたし、嫉妬した!!」

「えっ、えっ……え〜!?!」

あれで上手いの!? 本当に遊び感覚で弾いていただけなのに!!

純ちゃんは痛くは無いがポカポカと私の両肩を叩いてくる。そして、梓ちゃんは苦笑いしながら『気にしないほうが良いよ』と言って、肩をポンと叩いた。

本当に人生分らない事だらけだなあ……

こんな事をしながらも、私達は練習を始めた。放課後になると音楽室にやってきて、最終下校まで練習する。梓ちゃん曰く『もう一つの軽音部が出来たみたい』と喜んでいた。

私はおばあちゃんがくれた大切な青いオカリナを持って、学校へ来て練習している。

今まで使う機会が全く無く、宝の持ち腐れ状態だったので、使う機会が出来て本当によかったと心の中でひっそりと思っていた。

そして、驚いた事に私がバンドでいう『リード』を担当する事になってしまい、梓ちゃん達が『リズム』を担当する事になったのだ。これには流石の私も反論したのだが、純ちゃんの『憂なら大丈夫！』と一点張りで押し切られてしまった。

それにしても練習を続けて分かった事がある。それは大好きな楽器を自分が演奏していると、自然と幸せになるという事だ。

(お姉ちゃんも大好きなギターを演奏している時は幸せなのかな?)

ふと目を瞑って想像すると、幸せそうにギターを演奏するお姉ち

やんの姿が自然と頭に浮かび、思わずクスリと笑ってしまった。

あと1つ気になるとしたら、純ちゃんは初めての音合わせの時に「駄目だ、何もかも憂に勝てる気がしない・・・」と悔しがっていた事ぐらいであって、基本的に楽しい練習の日々が続いた。

お姉ちゃんの誕生日会が行われる場所はこの音楽室に決まり、その事をお姉ちゃん達にも伝えた。

誕生日会の準備は万端、後は私達次第となった・・・

(お姉ちゃんを喜ばせたい・・・お姉ちゃんが幸せに笑う姿が一秒でも長く見たい・・・!!)

そんな単純な考えが私を動かす燃料となっており、ここまでやって来た。単純すぎて自分でもどうかと思うけど、単純だからここここまでやって来たのだ。

大好きなギー太にも触れず、頑張って受験勉強をしているお姉ちゃんに少しでも笑って欲しいと私は心の奥底から思う。

本当に小さな願いだけど、叶ったら凄く嬉しいな・・・

そして当日となった。そして驚く事にお姉ちゃんの誕生日を祝

うために溇先輩達以外に和さんとさわ子先生が来てくれたのだ。特に和さんは受験勉強等で忙しいハズなのに『唯の誕生日だから・・・』と言つて、無理して来てくれたのだ。

部屋の明かりを消して、ケーキの刺さっている蝋燭の火をお姉ちゃんが吹き消した。その瞬間、皆から『お誕生日おめでとう!!』と言われて、お姉ちゃんは照れて体をモジモジとしながら『ありがとう、みんなっ!!』と嬉しそうに言つた。

その次にプレゼントを渡す予定なので、いよいよ私達の出番がやって来た。

「お姉ちゃん、お誕生日おめでとうございます。私と梓ちゃんと純ちゃんの3人は考えた末に、お姉ちゃんへ音楽をプレゼントしたいと思います。この日のために一生懸命練習したので、どうか最後まで聞いてください」

お姉ちゃんはワクワクとした表情で私達を見守る中、演奏が始まった。

梓ちゃんと純ちゃんのギターから出る音と私の奏であるオカリナの音が上手い具合にマッチングし、演奏した。

演奏に集中していたのでお姉ちゃん達の反応は分からないが、オカリナ特有の優しい音色が演奏者である私を包み込むのだけは分かった。

1曲目が終わり、2曲目が終る。

2曲も演奏したのに、あっという間に終わってしまった。楽しい時間はまるでビデオの早送りのように過ぎ去ってしまった。

(お姉ちゃんは喜んでくれたかな……)

そんな不安を抱きながら恐る恐るお姉ちゃんを見て、驚いた。

お姉ちゃんは泣いていたのだ。ポロポロと涙が頬に流れていき、目は真っ赤でした。

「お姉ちゃん、大丈夫!？」

私はオカリナを持ちながら、急いでお姉ちゃんの元へ駆けつけた。すると、お姉ちゃんは何も言わずに自分の両手で私の両手を包み込み、祈るポーズをした。

「憂……」

「なあに、お姉ちゃん」

「……ありがとう。憂達が私の為に一生懸命練習して、こんな素敵なプレゼントを貰って……私すっごく嬉しい!!」

お姉ちゃんは笑顔になった。それは受験勉強をしている時には見なかった、とても幸せな笑顔だった。

「私もだよ。演奏が終わった後、一瞬だけ不安になっちゃったけど……こんなにお姉ちゃんが喜んでくれたから凄く嬉しいよ」

そう言うと、お姉ちゃんは私の事を優しく抱きしめて、私の耳元

でこう言った。

「素敵な幸せを私にプレゼントしてくれてありがとう、」
「憂」

(後書き)

「憂と唯のほのぼの幸せ話を書きたい!!」そんな思いでこの作品を書きました。

さて、この作品のタイトルは『シャーロットのおくりもの』という作品のタイトルから出来ました。

私は本ではなく映画でこの作品を知ったのですが、ほんわかとしていて個人的には、良かったですがやはり原作を読んだ人に感想を聞くと、『原作の方が良い』と聞いていますので……………

さて話が変わりますが、私はこの話に様なプレゼントが一番綺麗だと思っっています。

大切な人に喜んでもらうために頑張る……………単純ですが、現実では殆どあり得ないプレゼントだと思います。

勿論、現実でもありえる話ですが、私はそうそう聞いたことがありません。

なので、もし生きているうちにこの様なプレゼントを買ったら、それはとても幸せな事だと私は思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6855p/>

憂のおくりもの

2011年7月15日15時21分発行